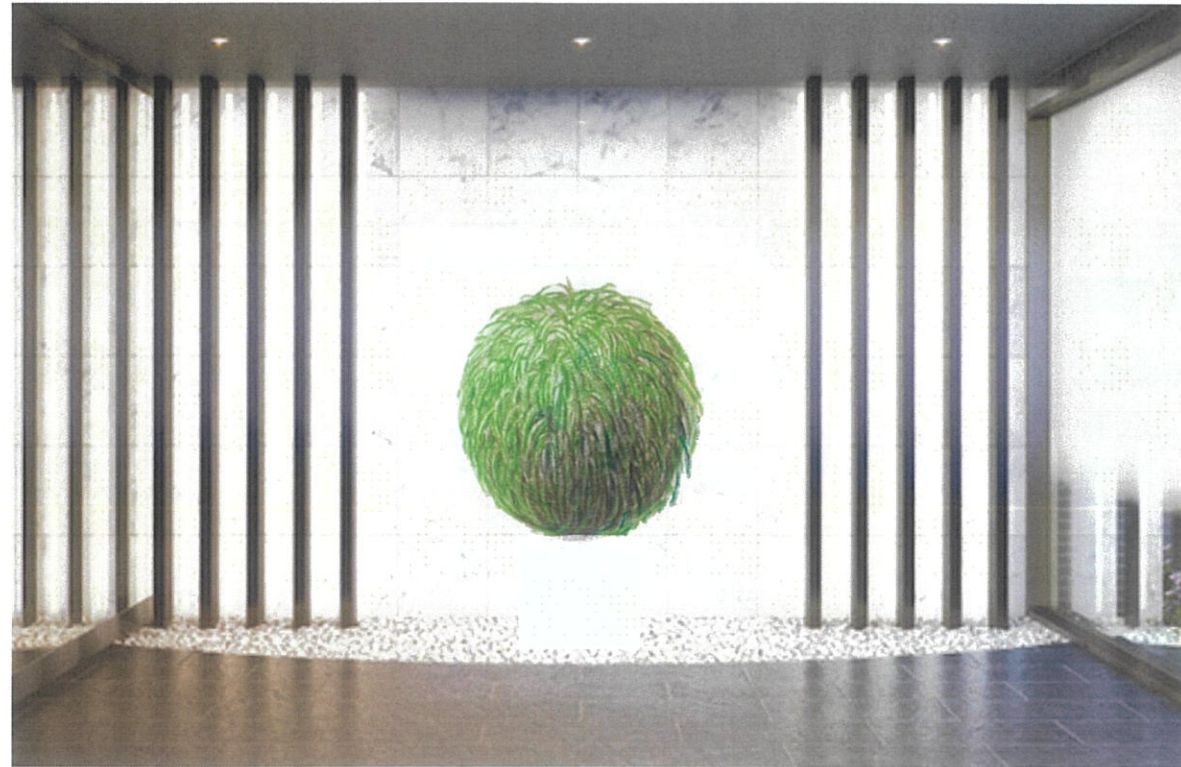


作品 および 設置イメージ・説明・制作方法 ※台座のサイズも分かるように記入ください

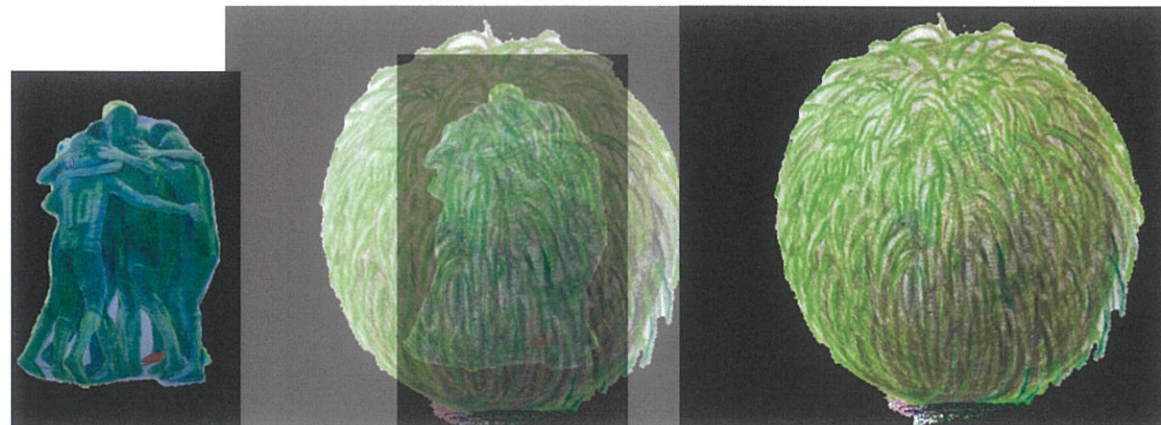


作品表面は風にかすかになびき、エントランスを行き交う人々に毎日違った彩りをみせる。

中心に抱き合う群像の立体物があり、この表面から紐状のものが全体を覆い尽くす形で形を成す彫刻作品。
普通には中に何が入っているかわからないが、かすかに表面が揺れる時に群像の気配が生じる。
紐状のものを縫い付けるような方法で群像に取り付ける。
群像は粘土などで整形しプラスティックに変えたもの。
素材の特性で作品表面は風にたなびき環境と呼応する。
耐久性のある素材を採用する。台座はh40w40d40(cm)



作品表面のイメージ



中に抱き合う群像 その表面から紐状のものが出ている。 全体を覆い隠して中は見えない。

作品名	むれやなぎ	作品NO.	67
素材	樹脂、紐状のシリコンゴム、あるいはアクリルゴム	想定重量	15 kg
作品サイズ	横幅 1000 × 高さ 1000 × 奥行 1000 (単位: mm)		

作品コンセプト

私は衣服を人間の皮膚に次ぐ第二の皮膚であると考え、衣服をほどき、再び組み立てる方法で作品を制作しています。いわば衣服は人間の記憶や生活が染み込んだ遊離した身体のようなものであり、これを解体しつなぎ合わせることで、人間同士の関係やコミュニケーションについて表現しています。

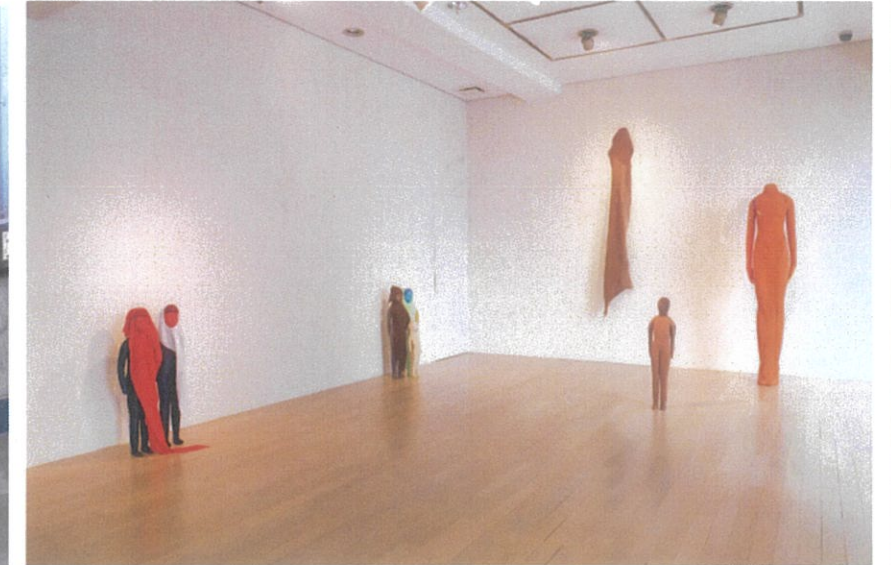
この度のコロナの影響の中での自粛や移動制限は、私たちに遠隔的な非接触のコミュニケーションの可能性を示しましたが、それ以上に触れることや直接人と会うコミュニケーションの代え難さを再認識させるものでした。

この作品は、抱き合っただけさめあっているような、あるいは健闘を讃え合う野球少年たちのような人の塊から、彼らのふれあいを守るように紐状の皮膚が伸び全体を覆い尽くしているイメージの彫刻作品です。孢子のようでもあり柳のように風になびく柔らかな造形は何者をも受け入れていく優しさや柔軟さと命と人間の生の不可思議さを表現しています。

【過去の自分の作品】 ※画像や写真等を配置もしくは貼り付けてください



「cupido」サイズ可変、
ミクストメディア 2019



ギャラリーでの展示の様子

私は幼い頃から、なぜかお祭りなどで売られているような「お面」に強く惹かれてきました。それは自分自身でもあり誰かでもあるような不思議な存在のかげら、あるいはある種の可能性のようなもので、私はその捉えがたい魅力に惹かれると同時に、それを所有するようになっていきました。思えば、自分が彫刻を始めたことも、そのお面への興味の延長線上にあるものかもしれない、お面が身体を獲得した状態を目指してきたのかもしれない。

左の作品については、まさにお面が身体を獲得し行んでいるようなもので、自分がこれまで考えてきたことや興味がすっきりと表現できているのではないかと思います。具体的にはジェームスアソールにインスピレーションを受けて制作したものです。